

レーニンのイギリス労働運動論 (一)

富 沢 賢 治

「日和見主義にたいする闘争と切りはなせないように結びつけられないならば、帝国主義にたいする闘争は、空文句か欺瞞である」(レーニン「プロレタリア革命の軍事綱領」一九一六年)。

イギリスの労働運動にかんするレーニンの論述は、彼の書いた諸々の論文に断片的なかたちで存在する。本文は、これらの断片的言辞を整理して、レーニンのイギリス労働運動論の統一像をまとめあげることが目的とするものである。本論文は主として次の三つの部分より構成される。

一、序論。レーニンのイギリス労働運動論は、彼の思

想体系のなかで、また、マルクスおよびエンゲルスのイギリス労働運動論との関連で、どのように位置づけられるか、という問題を考察する部分(本稿はこの序論的部分にあたる)。

二、本論。レーニンのイギリス労働運動論を、その内容からみて、時期区分し、各時期ごとに論点を整理し、提示する部分(以下、次稿)。

三、結論。二の部分で年代順に提示された諸論点を総括し、論理的に再構成し、レーニンのイギリス労働運動論の統一像を提示する部分。

一 レーニンにおけるイギリス労働運動論の位置

レーニンはどのような視点からイギリスの労働運動を問題としたか。彼にとってイギリスの労働運動はいかなる意義をもつものであったか。イギリス労働運動論は、彼の思想体系のなかで、どのような位置におかれているのか。われわれは、このような問題を考察することからはじめよう。

1 レーニンのイギリス労働運動論の中心テーマ

なにがレーニンのイギリス労働運動論の中心テーマを構成しているかという問題は、彼の時代認識と無関係に論じえない。そこで、われわれは、彼のイギリス労働運動論の中心テーマを明らかにするという目的のために、まず、レーニンの現代史認識を考察することからはじめよう。

レーニンは自己の属する時代をどのような時代として認識していたか。周知のように彼はそれを「資本主義の最高の段階としての帝国主義」の時代と規定した。ところで、帝国主義の時代は、国際労働運動史の観点からす

れば、第二および第三インタナショナルの時代でもあった。そして第三インタナショナルを代表するレーニンは、彼の時代をつぎのように「世界史の新しい時代」のはじまりと規定する。

「第三共産主義インタナショナルの世界史的意義は、マルクスのもっとも偉大なスローガン、『社会主義と労働運動の一〇〇年の発展を総括するスローガン』、プロレタリアートの独裁という概念に言いあらわされるスローガンを、現実化しはじめたことにある。この天才的な予言、この天才的な理論は、現実となりつつある。」

世界史の新しい時代がはじまった。人類は、奴隷制の最後の形態、すなわち資本主義的奴隷制または賃金奴隷制をかなぐりすてつつある。

人類は奴隷制から自己を解放することによって、はじめて真の自由にうつりつつある。⁽¹⁾

このようにレーニンは、プロレタリアートの独裁というスローガンが、ロシア革命の成功と第三インタナショナルの創設とによって、現実化しはじめた点を重視し、ここに、人類史という巨視的な観点からする「世界史の新しい時代」のはじまりを宣言する。マルクスは、『経

『済学批判』の序言において、「人間社会の前史」はブルジョア的生産様式の時代とともにおわりをつける、と述べているが、レーニンは、おそらく、マルクスの言うこの「人間社会の前史」のおわりと照応する意味において、この「世界史の新しい時代」のはじまりという言葉を用いているのであろう。レーニンの歴史感覚からすれば、「奴隸制」からの人類の自己解放を現実化する第三インタナショナルの創設は、「人間社会の前史」から人間社会本来の歴史への移行を示す一大里程碑と解されたのである。

では、「新しい時代」を象徴するこの第三インタナショナルは、第一インタナショナルおよび第二インタナショナルとの関連で、レーニンにより、どのように位置づけられるか。彼は、第一・第二・第三インタナショナルのそれぞれの歴史的役割を要約して、こう書いている。

「第一インタナショナルは、社会主義のためにプロレタリアートの国際的闘争の土台をすえた。

第二インタナショナルは、運動が幾多の国で広範に大衆的にひろまる地盤を準備した時代であった。

第三インタナショナルは第二インタナショナルの活動

の成果を摂取し、その日和見主義的、社会排外主義的、ブルジョワ的、小ブルジョワ的な汚点をとりのぞき、プロレタリアートの独裁を実現しはじめた。」⁽²⁾

このようにレーニンによれば、第一インタナショナル（一八六四—一八七二年）が国際的労働者組織の土台をすえ、この土台のうえに第二インタナショナル（一八九一—一九一四年）は国際的労働運動の幅をひろげていったのであるが、そのことは同時に、革命的水準の低下と日和見主義（社会排外主義はレーニンにより日和見主義の一転化形態としてとらえられているので、本論文のなかで今後、両者の質の同一性が問題であり、両者の形態の差異が特別に問題とならないところでは、社会排外主義は日和見主義に内包される概念として表現される）の強化という欠陥を伴わずにはいなかった。この欠陥との闘争および各国でこの闘争を組織する共産党の結成を基盤にして、はじめて第三インタナショナルは創設された。

「第三インタナショナルは、日和見主義と社会排外主義にたいする多年の闘争、とくに戦争中の闘争の結果として、幾多の国に共産党が結成された一九一八年に事実上創設されたのである。」⁽³⁾

このようにレーニンにおいては、彼の時代は「世界史の新しい時代」と解され、それを象徴する第三インタナショナルの誕生は、日和見主義・社会排外主義との闘争、各国共産党の結成と不可分離に関連づけられて、述べられている。

レーニンのイギリス労働運動論も、日和見主義との闘争およびイギリス共産党の結成という、この相互に関連する二つの主要なテーマが中心となって構成されている。日和見主義との国際的闘争において、歴史的伝統をもち古典的形態にあるイギリスの日和見主義を批判することは、レーニンにとって不可欠の課題であったし、また、日和見主義と闘うイギリス共産党の結成は、第三インタナショナルの創設と関連して、彼にとってとくに重大な関心事であった。それゆえイギリスの労働運動にかんするレーニンの言及は、当然のことながら、これら二つのテーマにかんするものが多くなったのである。

2 レーニンにおけるイギリス日和見主義批判の意義
イギリス日和見主義批判は、レーニンにとって、どのような意義を有するものであったか。この問題はまた、

日和見主義一般と日和見主義の特殊イギリスの形態との関連を、彼がどのように把握していたか、という問題でもある。われわれは、A、日和見主義の本質、B、日和見主義発生の経済的基盤、C、日和見主義批判の重要性、D、日和見主義の特殊イギリスの形態、E、イギリス日和見主義批判の意義、という順序で、この問題を考察することにする。

A、日和見主義の本質。日和見主義についてレーニンは、これをつぎのように規定している。「日和見主義の根本的な階級的意義——あるいは、そう言いたければ、社会主義経済的内容——は、現代民主主義派のある分子が、幾多の個々の問題について、ブルジョワジーのがわに移った（事実上、すなわち、たとえ彼らがこれを意識しなくとも）ところにある。日和見主義は自由主義的な労働者政治活動である。……日和見主義の基本思想は、ブルジョワジーとその対立者との同盟もしくは接近（ときには協定、ブロック、等々）である。」「日和見主義者は、客観的には、帝国主義的超過利潤によって買収されて、資本主義の番犬に、労働運動腐敗化の実行者に変わった一部の小ブルジョワジーと労働者階級の若干の層とをあら

わしている。⁽⁵⁾」

このようにレーニンは、客観的にブルジョワジーの同盟者となることが日和見主義の真の役割だとする。⁽⁶⁾

B、日和見主義発生の経済的基盤。では、日和見主義はどのようにして発生したのか。レーニンによれば、それは、歴史の偶然によって発生したものではない。「日和見主義の完全な勝利と社会民主党の国権的自由主義的な労働党への転化とを意味するこの〔第二インタナショナルの——富沢〕崩壊は、一九世紀末と二〇世紀初頭の第二インタナショナルの歴史的時代全体の結果にすぎない。この時代——西ヨーロッパにおけるブルジョワ革命と民族革命との完成から社会主義革命の開始への過渡期——の客観的条件が、日和見主義を生みだし、つちかつたのである。⁽⁷⁾」では、日和見主義を生みだし、つちかつた第二インタナショナル時代の社会の客観的諸条件とはなにか。それは、レーニンによれば、まさに帝国主義そのものであった。さらに言えば、帝国主義に特有な、資本主義の寄生性と腐朽とが、日和見主義を生む経済的基盤を提供したのであった。帝国主義と日和見主義との関連についてのレーニンの議論は、『帝国主義論』(一九一六

年)の第八章「資本主義の寄生性と腐朽」、『帝国主義論』のフランス語版とドイツ語版の序文(一九二〇年)、論文「帝国主義と社会主義の分裂」(一九一六年)などにみられる。これらの文献のうちでも「帝国主義と社会主義の分裂」がとくにこの問題にかんするモノグラフであるので、以下、主としてこの論文によりながら、帝国主義と日和見主義とをレーニンがどのように関連づけているか、という問題を考察することにしよう。

レーニンは、帝国主義と日和見主義との関連という問題を「今日の社会主義の根本問題」であると規定して、この問題の解明を帝国主義の定義からは始めている。この帝国主義の定義⁽⁸⁾は、同じ年の数ヶ月前に書かれた『帝国主義論』における定義をさらに整理し簡潔化したものとして、レーニンの「帝国主義」概念を検討するにさいして看過できない重要な資料である。彼はまず、「帝国主義とは、資本主義の特殊な歴史的段階である」と規定しておいて、つぎにこの「特殊な」という意味内容を説明する。彼によれば、「この特殊性は三とおりである。すなわち、帝国主義とは、(一)独占資本主義、(二)寄生的な、または腐敗しつつある資本主義、(三)死滅し

つつある資本主義、である。」

これら三つの特殊性のうち帝国主義の根本的な経済的特徴であり、その本質をなすものは(一)の独占資本主義すなわち独占が自由競争によってかわったことにあるとされる。そして、レーニンによれば、このような「独占主義」(МОНОПОЛИЗМ)は、つぎの五つの主要な「姿態」(ВИД)をとって現われる。「(1)カルテル、シンジケート、トラスト。生産の集積は、これらの独占的な資本家団体を生みだすほどの程度に達したのである。

(2)大銀行の独占的地位。三つないし五つの巨大銀行が、アメリカ、フランス、ドイツの経済生活全体を支配している。(3)トラストと金融寡頭制(金融資本とは銀行資本と融合した独占的産業資本である)とによる原料資源の占取。(4)国際的カルテルによる世界の(経済的)分割がはじまっている。世界市場全体を支配し、『むつまじく』それを分けあっている——戦争がそれを再分配するときまで——このような国際的カルテルの数は、すでに一〇〇をこえている。非独占的な資本主義のもとでの商品輸出と区別される、とりわけ特徴的な現象としての資本の輸出は、世界の経済的および政治的

地域的な分割と密接にむすびついている。(5)世界の地域的分割(植民地)は終了した。」

つぎに、「寄生的な、または腐敗しつつある資本主義」という帝国主義の第二の特殊性についてレーニンは下記の諸特徴をあげる。(1)「帝国主義が寄生的な、または腐敗しつつある資本主義であることは、……生産手段の私的所有のもとでのあらゆる独占の特徴である腐敗の傾向に現われている。」(2)「資本主義の腐敗は、金利生活者、すなわち『利札切り』で生活する資本家の膨大な層が作りだされていることに現われている。」(3)「資本輸出は自乗された寄生性である。」(4)「『金融資本は支配をめざすものであつて、自由をめざすものではない。』全線にわたる政治的反動は、帝国主義の特性である。収賄、大じかけな買収、各種の疑獄。」(5)「……被抑圧民族の搾取、とりわけ、ひとにぎりの『大』国による植民地の搾取は、『文明』世界を、ますます、幾億人の非文明民族の肉体にくつついた寄生虫へと変えていく。……帝国主義的大国のプロレタリアートの特権的な層は、いくぶんは、幾億人の非文明民族の費用で生活している。」

最後に、「死滅しつつある資本主義」という帝国主義の第三の特殊性についてレーニンは(「帝国主義と社会主義の分裂」における帝国主義のこの定義では)、簡単に「死滅しつつある」とどめている。「帝国主義が死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義である」という理由は、明らかである。資本主義から生じる独占は、すでに資本主義の死滅であり、資本主義から社会主義への移行のはじまりである。帝国主義による労働の大部分がかりな社会化……も、やはりこのことを意味する。」

以上が、「帝国主義と社会主義の分裂」におけるレーニンの「帝国主義」の定義である。この定義と『帝国主義論』における定義との異同についてここで論ずる余裕はないが、本稿の行論の必要上ここではさしあたりつぎの点に注意しておかなければならない。すなわち、『帝国主義論』に依拠してよく帝国主義の五つの指標とされるものが、実は帝国主義全体にかなする五つの指標ではなく、ここで明らかなくとく、帝国主義の三つの特殊性のうちの一つである「独占資本主義」にかなするものとして、それも「独占主義」がとる「五つの主要な姿態」

として、叙述されているという点である。なるほど独占が自由競争にとってかわったことが帝国主義の根本的な経済的特徴であり、その本質であることを軽視することは許されないが、だからといって、帝国主義の一つの特殊性のみを重視するあまり、他の二つの特殊性の重要性を軽視し、三者のあいだの論理的関連を見失ってしまったのでは、帝国主義の全体像を正しく把握することはできない。帝国主義の根本的な経済的特徴である独占の分析を基礎に、さらに帝国主義の寄生性と腐朽および死滅性をも視野におさめないでは、十全な帝国主義批判はなされえない。レーニンが、帝国主義の独占と寄生性との関連を重視して、帝国主義と日和見主義との関連を「今日の社会主義の根本問題」として提示した背景には、彼のこのような帝国主義観があったのである。

では、帝国主義の寄生性と腐朽とは、いかにして日和見主義を生みだす経済的基盤を提供するか。レーニンは、『帝国主義論』のフランス語版とドイツ語版の序文で、およそつぎのように述べている。

帝国主義段階の資本主義は、ひとにぎりのとくに富裕で強力な国家をつくりあげた。これらの国家は、たんな

る「利札切り」によって、全世界を略奪する。資本家たちは、自国の労働者から搾取する利潤以上に余分の利潤、超過利潤を獲得する。帝国主義諸国の資本家たちは、このような超過利潤の一部で、労働者の指導者と労働貴族の上層とを、直接あるいは間接に、公然あるいは隠然たる方法で、種々さまざまな方法で、買収することができ、労働貴族のこの層は、その生活様式、その稼ぎ高、その全世界観の点で、小市民的である。ブルジョワジーを支える「軍事的支柱」とならんで、彼らは、ブルジョワジーを支える主要な「社会的支柱」となる。なぜなら、彼らは、資本家階級の労働担当副官であり、改良主義と排外主義の伝達者だからである。階級闘争において彼らはブルジョワジーの側に立つ。

日和見主義発生の経済的基盤についてはより一層の究明が必要である。しかしこの序論的部分では、レーニンの右のような要約的説明を紹介するにとどめておこう。

C、日和見主義批判の重要性。レーニンによれば、このようなしくみのもとで生みだされた日和見主義は、帝国主義段階にあるヨーロッパ諸国の労働運動や国際的労働運動に分裂をもたらした。しかも第一次世界大戦がつ

くりだした社会的危機は、「ブルジョワジーの同盟者であるという日和見主義の真の役割」を明瞭にしめした。だから一九一五年のレーニンは日和見主義の排除を強く主張する。「労働者党からこのような（日和見主義の——富沢）要素を完全に組織的に切りはなすことが必要となった。帝国主義時代は、革命的プロレタリアートの先進分子と、『自』国の『大国的な』地位の特権からのおこぼれを頂戴している、労働者階級の半小市民的な貴族とが、同一の党内に共存することをゆるさない⁽¹⁰⁾」と。

このようにレーニンにとって、帝国主義との闘争は日和見主義との闘争と密接不可分離に結びついていた。すでに本論文の冒頭に掲げたように、一九一六年のレーニンは、「日和見主義にたいする闘争と切りはなせないように結びつけられないならば、帝国主義にたいする闘争は、空文句か欺瞞である」と主張し、さらに一九二〇年には、日和見主義の発生を要因とする労働運動の国際的分裂という世界的現象にかんして、「この現象の経済的根底を理解することなしには、またその政治的および社会的意義を評価することなしには、共産主義運動とすべき社会革命との実践的任務の解決という面で、一歩

もすすむことができない⁽¹¹⁾」と主張したのである。

D、日和見主義の特殊イギリス的形態。では、このような問題関心をもっていたレーニンは、日和見主義一般との対比において、日和見主義の特殊イギリス的形態をどのように位置づけたのであろうか。

レーニンによれば、「世界資本主義の帝国主義時代」は一八九八—一九〇〇年以後にはじまる⁽¹²⁾。そして、アメリカ、ヨーロッパ、アジアにおける帝国主義は、一八九八—一九一四年ごろまでに完全に形づくられる⁽¹³⁾。だが、イギリスには、すでに一九世紀の半ばから帝国主義の二大特徴が存在していた。一つは、広大な植民地であり、他は、世界市場における独占的地位の結果としての独占利潤である。そして、このどちらの点でも、イギリスは当時資本主義諸国のうちの例外であった。しかもイギリスは、一八四八年から一八六八年にかけて、またいくぶんはそのあとでも、独占的地位を維持することができた。きわめて広大な植民地の独占と工業上の独占とをもつ国はほかにはなかった⁽¹⁴⁾。ここにレーニンは「イギリスの特殊性」を認めるのである⁽¹⁵⁾。

イギリスがこのような特殊性をもつ国であればこそ、

「だから、そイギリスでは、数十年にわたって日和見主義が勝利することができたのである」と、レーニンは言う⁽¹⁶⁾。では、「なぜイギリスの独占ということが、イギリスで日和見主義の……勝利した理由を、説明するのか？」この問にたいして彼はこう答えている。「独占は超過利潤を、すなわち、正常な、全世界で通常のものとなっている資本主義的利潤をこえた余分の利潤を、もたらす……資本家は、自国の労働者を買収し、ある種の同盟（ウェップ夫妻が記述している、イギリスの労働組合とその雇主たちとの有名な『同盟』を思い出せ）——ある一国の労働者とその資本家とがほかの国々に対抗してむすぶ同盟——をつくりだすために、この超過利潤の一部分を……投げあたえることができる⁽¹⁷⁾。」レーニンは、帝国主義国のブルジョワジーが労働者の上層を買収するこのような経済的可能性を強調し、「超過利潤」が現実、いどのように「労働者大臣」、「労働者議員」、「労働官僚」、「狭隘なツンフト的組合に組織された労働者」等々に分配されるかということは、第二義的な問題にすぎない、として⁽¹⁸⁾いる。

E、イギリス日和見主義批判の意義。レーニンは、一

九世紀イギリスの日和見主義をこのように説明し、イギリスが、数十年にわたる日和見主義の勝利という面においても、当時の資本主義諸国のうちの例外であったことを指摘する。だが、例外であったということの意味は、当然のことながら、一九世紀イギリスの帝国主義的特徴と日和見主義との関係が当時の世界資本主義の発展段階からみると例外的であったということであり、それが不均等発展の法則の一例をなすことを否定するものではない。資本主義の不均等発展の法則は、労働運動をも規制する。「プロレタリアートの国際的な革命運動は、さまざまな国で均等に、おなじ形をとってすすむものではなく、またすすむはずもない。」⁽¹⁹⁾日和見主義という現象をとってみても、労働者階級の上層が、植民地領有から生ずる「一定の超過利潤と特別の特権との総和」の一部を享有するというような、「その当時にはイギリスだけの例外的な現象であったものが、ヨーロッパのすべての大本主義国が大規模な植民地領有へうつるにしがたい、また一般に資本主義の帝国主義時代が発展し成長するにしたがつて、これらの大資本主義国に共通の現象となつた⁽²⁰⁾」のである。

このようにして「例外的な現象」は、いまや「共通の現象」となった。特殊が一般となった。しかもこの日和見主義一般の理解のために、その特殊イギリスの形態が一つの典型例を提示するという関係になっている。このような意味でレーニン⁽²¹⁾は、イギリスをブルジョワ的労働者政治の「古典国」と名づけたのである。この「古典国」においては、事態の本質が、他の諸国におけるよりも、より純粹な、より透明なかたちで、呈示されている。だからレーニンにとっては、「マルクス主義的な言葉が、マルクス主義の完全な放棄の覆いとなっている」帝国主義時代において、「マルクス主義的な言葉をつかわずに問題のマルクス主義的な本質をわれわれに示してくれるイギリスの諸関係⁽²²⁾」を学ぶことが、とくに重要な意義をもつことになる。たとえば、帝国主義時代に特有な社会排外主義は、社会主義的な覆いをまとっているために、その本質を理解することが容易ではない。しかし、レーニンによれば、「イギリスの……特殊性は、一方では、われわれがこんにちの社会排外主義の本質をそれだけ容易に理解するのをたすけ……、他方では、これらの特殊性は、社会排外主義との協調政策——それは、たとえば

(37) レーニンのイギリス労働運動論 (一)

平和のスローガンをほめたたえることなどに現われている——の意義をわれわれが事実にもとづいて評価するのをたすける。⁽²³⁾ それゆえ、レーニンはこう主張するのである。「いっそう発展している国の諸関係を一瞥する」とは、教訓的である。ここでは、詭弁やマルクス主義の戯画でだまされるものは、だれもない。問題がいっそう率直に、いっそう正しく提起されているのである。われわれは、『先進的』なイギリス人からまなぶことにしよう⁽²⁴⁾と。

このようにレーニンは、イギリスを日和見主義と自由主義的労働者政治の「古典国」としてとくに重要視し、これに批判のほこ先を向けたのであった。ところで、一九世紀イギリスの自由主義的労働者政治にたいする基本的な批判は、すでにマルクスとエンゲルスとによって、なされていた。レーニン自身も、イギリスの日和見主義を批判するにさいして、しばしばマルクスとエンゲルスとの批判に言及している。そこでわれわれは、レーニンのイギリス労働運動論にたいする形成史的考察をはじめ前に、レーニンが、彼なりの問題意識をもって、これら先駆者の批判からどのような点を学びとって、それを

自己の理論構成のための素材としたか、という問題を、次章において考察しておくことにしよう。

- (1) レーニン「第三インターナショナルとその歴史上の地位」(一九一九年)、『レーニン全集』大月書店、第二十九巻、三〇五ページ。以下、全・XXXIX・三〇五ページと略記。
- (2) 同上、三〇五ページ。
- (3) 同上、三〇四ページ。
- (4) レーニン「よその旗をかかげて」(一九一五年)、全・XXI・一四七ページ。
- (5) レーニン「帝国主義と社会主義の分裂」(一九一六年)、全・XXXIII・一一七ページ。
- (6) レーニン「第二インターナショナルの崩壊」(一九一五年)、全・XXXI・二五八ページ、参照。
- (7) 同上、二五八ページ。
- (8) 「帝国主義と社会主義の分裂」、全・XXXIII・一一二—一四ページにこの定義が書かれている。
- (9) レーニン『帝国主義論』のフランス語版とドイツ語版の序文(一九二〇年)、全・XXXII・二二—二三ページ。
- (10) 「第二インターナショナルの崩壊」、全・XXX・二五八ページ。
- (11) 『帝国主義論』のフランス語版とドイツ語版の序文(一九二〇年)、全・XXXII・二二三ページ。
- (12) 「帝国主義と社会主義の分裂」全・XXXIII・一一九ページ。

(13) 同上、一一三ページ。この時期の主要な歴史的道標としてレーニンのは、「スペインアメリカ戦争（一八九八年）、イギリスボーア戦争（一八九九—一九〇二年）、日露戦争（一九〇四—一九〇五年）、一九〇〇年のヨーロッパの経済恐慌」をあげている（同上、一一三ページ）。

(14) 同上、一二三ページ。

(15) 同上、一九九ページ。

(16) 同上、一二三ページ。

(17) 同上、一二二ページ。

(18) 同上、一二三ページ。

(19) レーニン「世界政治における可燃材料」（一九〇八年）、全・XV・一七一ページ。

(20) 「よその旗をかかげて」、全・XXI・一四五ページ。

(21) 「帝国主義と社会主義の分裂」、全・XXIII・一二五ページ。

(22) レーニン「イギリス人の平和主義とイギリス人の理論」（一九一五年）、全・XXI・二六八ページ。

(23) 同上、二六二—三ページ。

(24) 同上、二六七ページ。

二 マルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論のレーニンによる継承

レーニンは多くの論文でマルクス、エンゲルスのイギ

リス労働運動論に言及しているが、（個別具体的問題——たとえばアイルランド問題——に坎する考察を除いて）それがかなり総括的なたちで紹介、考察されているのは、つぎの諸文献においてである。

1、『J・F・ベッカー、J・ディーツゲン、F・エンゲルス、K・マルクス、その他からF・A・ゾルゲ、その他への手紙』のロシア語訳の序文（一九〇七年）。

2、「カール・マルクス」⁽²⁾（一九一四年）。

3、『帝国主義論』⁽³⁾（一九一六年）。

4、「帝国主義と社会主義の分裂」⁽⁴⁾（一九一六年）。

これらの諸文献におけるマルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論のレーニンによる紹介はかなり重複しているが、考察する見地がそれぞれ多少異なっている。1の文献では、イギリスの社会主義運動が労働運動から遊離しているというマルクス、エンゲルスの批判を中心にしながら、2の文献では、プロレタリアートの階級闘争の戦術という見地から、3の文献では、イギリス資本主義の帝国主義的特質と労働運動における日和見主義との関連性という見地から、そして4の文献では、国際社会主義運動の分裂（「革命的社会主义主義」と「日和見主

義」という二つの潮流への分裂」という問題視点から、マルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論が紹介、考察されている。

これらの文献のうちでもマルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論が、他の諸文献とくらべて、かなりくわしく紹介されているのは、「帝国主義と社会主義の分裂」においてである。この論文でレーニンは、イギリス労働運動にかんするマルクスとエンゲルスとの文章をかなりくわしく抜き書きし、そしてその抜き書きを読者に提示するにあたって、解説を付している。この解説によって、われわれは、レーニンが、どのような問題関心をもってマルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論を研究したか、を知ることができる。この解説で彼はつぎのように述べている。

「一九一四—一九一六年に全世界であのようにはっきりしたものとをわかった、今日の労働運動内の二つの傾向「革命的社会民主主義」と「日和見主義」——富沢」、むしろ二つの党は、エンゲルスとマルクスがイギリスで、おおよそ一八五八年から一八九二年まで、数十年のあいだあつたものである。マルクスもエンゲルスも、世

界資本主義の帝国主義時代を見ずに死んだ。この帝国主義時代は、一八九八—一九〇〇年以後にようやくはじまったのである。だが、イギリスの特殊性は、この国ではすでに一九世紀の半ばから、帝国主義のすくなくとも二つの最大の特徴が存在していたことにある。それは、(一) 広大な植民地、(二) 独占利潤(世界市場における独占的な地位の結果として)、である。このどちらの点でも、イギリスは当時資本主義諸国のうちの例外であった。そして、エンゲルスとマルクスは、この例外を分析して、そのことと、イギリスの労働運動内の日和見主義の(一時的)勝利との関連を、まったく明瞭に、明確に指摘した。⁽⁵⁾このような導入部にひきつづきレーニンは、マルクス、エンゲルスの言葉を抜き書きし、それを数ページにわたって読者に提示し、最後のまとめとして、「われわれは、読者が全体としてそれを研究できるように、わざとマルクスとエンゲルス自身の言葉をかなりくわしく抜き書きした。そして、これは研究されなければならぬ。これについては、注意ぶかく熟考する値うちがある。なぜなら、ここに、帝国主義時代の客観的諸条件が指示する労働運動の戦術の中心点があるからで

(6)ある」と述べている。ここに、われわれは、マルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論研究にレーニンがどのような意義づけをしたかを知ることができる。すなわち、約言すれば、彼は、日和見主義の本質を究明し、日和見主義と闘争するための正しい戦術を学びとるために、彼の先駆者たちのイギリス労働運動論を研究したのである、と言えよう。

レーニンは、「帝国主義と社会主義の分裂」においてだけではなく、文献2と3においても、マルクス、エンゲルスの言葉を多く引用している。レーニンは彼らの言葉を主として年代順に引用、提示し、これらの素材を読者の研究に委ねているのであるが、本論文においては、レーニンがマルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論からどのような点を学びとったのかという問題を解明するために、レーニンが提示するこれらの素材を、テーマ別に分類しなおしてみたいと思う。

レーニンが提示するマルクス、エンゲルスの断片的言辞とそれらにたいするレーニンの評価とを、このようなわれわれの問題関心から整理しなおしてみると、それらは、(一)イギリスの世界市場独占・植民地独占とプロ

レタリアートの一部分のブルジョワ化現象との関連性、(二)イギリスのプロレタリアート一般の「ブルジョワ化」現象、(三)社会主義運動と労働運動との分離、および(四)プロレタリアート下層大衆への期待、という四つの問題群に分類されうる。以下においてわれわれは、レーニンがマルクスとエンゲルスをどのように紹介し、評価したかを調べてみることにしよう。

(一)イギリスの世界市場独占・植民地独占とプロレタリアートの一部分のブルジョワ化現象との関連性。この問題がマルクス、エンゲルスとの関連で考察されているのは、主として『帝国主義論』の第八章「資本主義の寄生性と腐朽」と論文「帝国主義と社会主義の分裂」においてである。『帝国主義論』においてレーニンは、「労働者を分裂させ、彼らのあいだで日和見主義を強め、労働運動の一時的腐敗を生み出すという帝国主義の傾向が、イギリスでは、一九世紀末から二〇世紀初めにかけてよりもはるかに以前に現われたということとを、とくに注意しておかなければならない。……マルクスとエンゲルスは、労働運動における日和見主義とイギリス資本主義の帝国主義的特質とのこの関連を、数十年にわたって系

統的に研究した」と述べ、エンゲルスの言葉(マルクスの言葉はない)をつぎのように引用している。⁽⁷⁾「たとえば、エンゲルスは一八五八年一〇月七日にマルクスにあててつぎのように書いた。『イギリスのプロレタリアートは、事実上ますますブルジョワ化しつつあり、その結果、すべての国民のうちでもっともブルジョワ的なこの国民は、ついには、ブルジョワとならんで、ブルジョワ的貴族とブルジョワ的プロレタリアートをもつところまで行きつこうとおもっているように見える。全世界を搾取している国民にあつては、これはたしかにある程度まで当然のことである。』それからほとんど四分の一世紀ののち、一八八一年八月一日づけの手紙のなかで、エンゲルスは、『中産階級に身売りしたか、あるいはすくなくとも彼らから金をもらっている人間に、あまんじてひきまわされている最悪のイギリスの労働組合』について述べている。さらにその後、一八八二年九月一二日づけのカウツキーあての手紙のなかでは、エンゲルスはこう書いている。『君は、植民地政策について、イギリスの労働者がどう考えているかと質問する。ところで、彼らの考え方は全体として政治についての彼らの考え方とまったく

おなじなのだ。つまり、ブルジョワが考えるとおりに考えている。当地には労働者政党が存在しない。あるのはただ保守党と急進自由党だけだ。そして労働者とはいえば、イギリスの世界市場独占と植民地独占とのおすそわけに気楽にあずかっているというわけだ。……」

また、労働貴族や労働運動指導者たちの日和見主義にかんするマルクスとエンゲルスの観察は、「帝国主義と社会主義の分裂」のなかではつぎのように紹介されている。

「一八七二年九月二一日づけのゾルゲにあてた手紙では、エンゲルスは、ヘイルズ(Hails)がインタナショナルの(イギリス)連合評議会で大騒ぎをもちあげ、マルクスが『イギリスの労働指導者たちは身売りした』と言ったという理由で、マルクスにたいする譴責決議をとおしたことを報じている。マルクスは、一八七四年八月四日づけで、ゾルゲにあててこう書きおくっている。

(イギリスの)『都市労働者についていえば、その指導者の一党が全員議会にはいらなかったことは残念である。そうなることが、この賤民どもをやっかいばらしいいちばん確かな道だったのに。』エンゲルスは、一八八一

年八月一日づけのマルクスにあてた手紙のなかで、『ブルジョワジーに買収されたか、すくなくとも彼らから金をもらっている連中に引きまわされている最悪のイギリス労働組合』といっている。⁽⁸⁾「一八八九年十二月七日には、エンゲルスはゾルゲにあててこう書きおくっている。……『当地で』(イギリス)『もっとも胸の悪いものは、労働者の血や肉まで深くしみこんだブルジョワ的なお上品ぶり』(respectability)である。……私がいちばんりっぱな男とおもっているトム・マンすら、ロンドン市長閣下と昼食をとにもするのだ、などと吹聴したがるしまつである。これにフランス人を対比してみれば、革命というものがどんな役にたつかがわかるであろう。⁽⁹⁾」と。『エンゲルスが、数十年のあいだくりかえして述べてきたこれらの思想を、彼が公けに、出版物のなかでも表明したことは、一八九二年の『イギリスにおける労働者階級の状態』第二版の彼の序文が証明している。そこには、『労働者の広大な大衆』に對置して、『労働者階級中の貴族』のことが、『労働者の特権的な少数者』のことが、論じられている。一八四八—一八六八年におけるイギリスの特権的地位から『持続的な利益』を得た

のは、労働者階級の『特権的な、保護された、わずかな少数者』だけであって、『大多数の労働者については、せいぜいその状態が一時改善されただけであった。』……イギリスの工業上の『独占の崩壊とともに、イギリスの労働者階級はこの特権的地位を失うであろう。』……イギリスで『いわゆる労働者議員』と呼ばれているのは、『自分で、労働者という自分の資格を自分の自由主義の大海のなかに投げこみたがっているという理由で、労働者であることを大目にみてもらっている』連中である。⁽¹⁰⁾レーニン⁽¹¹⁾は、マルクスとエンゲルスのこのような発言を引用し、これらの発言をつぎのように解釈している。「ここには、原因と結果とが明白に指摘されている。原因は、(一)この国による全世界の搾取、(二)世界市場におけるその独占的地位、(三)その植民地独占、である。結果は、(一)イギリスのプロレタリアートの一部分のブルジョワ化、(二)プロレタリアートの一部分が、ブルジョワジーによって買収されているか、あるいはすくなくとも彼らから金をもらっている人間に自分たちの指導をゆるしていること、である。⁽¹¹⁾」

このようにしてレーニンは、マルクスとエンゲルスと

から(直接的にはエンゲルスから)、イギリスの世界市場独占・植民地独占とプロレタリアートの一部分のブルジョワ化現象とを関連づけることを学びとったのである。

(二) プロレタリアートの「ブルジョワ化」現象。この現象にかんするマルクスとエンゲルスとの見解は、主として、「カール・マルクス」の最終節の「プロレタリアートの階級闘争の戦術」において、考察されている。

レーニンは、引用にさいして、『マルクスとエンゲルスの往復書簡集』(一九一三年版)の引用ページ数を記しているが、引用した手紙が書かれた年月日を記していないし、さらに引用文がマルクスによるものかエンゲルスによるものかも記していない。そこで、本論文では、該当箇所を、筆者名と年月日を付し(さらに『往復書簡集』のページを略して)、引用することにしよう。

レーニンは、きたるべき戦いにそなえてプロレタリアートの軍勢を訓練すべき長期の「平和的」期間における経済闘争と労働組合運動との綱領と戦術を理解するためには、イギリスの労働運動の例についてマルクスとエンゲルスがあたえたおびただしい指摘を、つきあわせてみる必要がある、として、マルクスとエンゲルスのつぎの

ような指摘を引用している。「……産業の『繁栄』が、『労働者を買収し』(一八五一年二月五日づけエンゲルスの手紙)、彼らを闘争からそらせようとする試みを呼びおこしていること、この繁栄が一般に労働者の『士気を退廃させる』こと(一八五七年一月一七日づけエンゲルスの手紙)、イギリスのプロレタリアートは『ブルジョワ化』しつつあり、『すべての国民のうちでもっともブルジョワ的なこの国民……は、ついには、ブルジョワジーとならんで、ブルジョワ的貴族とブルジョワ的プロレタリアートをもつところまですすみたがっているように見える』こと(一八五八年一月七日づけエンゲルスの手紙)、イギリスのプロレタリアートの『革命的エネルギー』が消滅しつつあること(一八六三年四月八日づけエンゲルスの手紙)、『イギリスの労働者がこうわっているようにみえるブルジョワ的感染からぬけだす』までには、かなり長いあいだ待たなければならないだろうということ(一八六三年四月九日づけマルクスの手紙)、イギリスの労働運動には『チャーティストの熱情』が欠けていること(一八六六年四月二日づけマルクスの手紙)、イギリスの労働者の首領たちは、そのタイプからいって

『急進的ブルジョワと労働者』との中間物のようなものになりつつあること(一八六九年一月一九日づけエンゲルスの手紙)、イギリスの独占のおかげで、そしてこの独占が打破されるまでは、『イギリスの労働者はうごこうともしない』こと(一八八一年八月一日づけエンゲルスの手紙)、——これらがその指摘である。これらの指摘を引用したあとで、レーニンは、それを評価して、「ここでは、経済闘争の戦術は労働運動の一般的行程(およびその結果)と関連させて、いちじるしく広範な、全面的な、弁証法的な、真に革命的な見地から考察されている」と述べている。しかしわれわれは、むしろこれらの指摘から直接的に読みとれることが、世界市場独占・植民地独占に基礎をもつイギリスのプロレタリアート一般の「ブルジョワ化」現象である点に注目すべきであらう。

(三) 社会主義運動と労働運動との分離。この問題は、主として上記の文献1において考察されている。この文献は、書簡集の序文として書かれているので、そこでは、マルクス、エンゲルスからの直接的引用はあまりなされず、彼らの手紙のなかで一貫して主張されている問題を

レーニンが解説するというかたちがとられている。レーニンは、この問題にかんして、およそつぎのような三点を指摘している。⁽¹²⁾

一、イギリスでもアメリカでも、一九世紀の最後の三分の一期には、プロレタリアートは、政治的独立性を発揮しなかった。ブルジョワ民主主義的な歴史的任務がほとんどなくなってしまうこれらの国の政治的舞台は、ブルジョワジーにより独占されていた。

二、これらの国における労働運動の基本的特徴として、プロレタリアートが国民的な民主主義的任務に直面していないこと、プロレタリアートが完全にブルジョワジーの政策に従属していること、少数の社会主義者がプロレタリアートからセクツ的に遊離していること、および選挙のさいに社会主義者が労働者大衆のあいだで成功をおさめていないこと、などをあげることができる。

三、マルクスとエンゲルスは、労働者の政治的独立性がみられない国の社会主義者にたいして、狭いセクツ主義を根絶し、労働運動と融合し、それによってプロレタリアートを政治的にふるいたたせるようにおしえた。エンゲルスは、独立した労働者党を結成することの重要性

を強調した。

こうしてレーニンは、「マルクスとエンゲルスがイギリスとアメリカの社会主義について、なによりもはげしく批判しているのは、それが労働運動から切りはなされていることである」⁽¹³⁾と結論する。

(四) プロレタリアート下層大衆への期待。この問題にかんしては、「帝国主義と社会主義の分裂」において、もっぱら晩年のエンゲルスの見解が、考察されている。レーニンは、エンゲルスの手紙から、つぎの箇所を引用している。⁽¹⁴⁾

イギリスの労働者階級の「運動は地表の下ですんでいて、ますます広範な層をまきこんでいるが、これまで不活発であった最下層の大衆のあいだで、それがまさにもっとも著しい。そして、この大衆が突然自分自身を、さとり、自分たちこそこの動きつつある巨大な大衆であるということに気づく日は、もう遠くはない。」(一八九〇年四月一九日づけエンゲルスの手紙)

「崩壊した波止場労働組合の失敗。古い保守的な労働組合、富んだ、だからこそ臆病な組合だけが、場面にのこっている。」(一八九一年三月四日づけエンゲルスの手

紙)

ニューカッスルの労働組合大会で古い組合主義者たち、八時間労働日の反対者たちが敗北を喫した。「そして、ブルジョワ新聞も、ブルジョワ的労働者党の敗北を完全に……みとめている。」(一八九一年九月一四日づけエンゲルスの手紙)

これら手紙の文章の引用にひきつづき、レーニンはさらに、『イギリスにおける労働者階級の状態』第二版の序文(一八九二年)のなかから、エンゲルスが、不熟練労働者の労働組合員の長所として、「ブルジョワ的偏見にまったくとらわれていないこと」を指摘している箇所を、引用している。⁽¹⁵⁾

ここにレーニンによって引用されたエンゲルスの文章は、一八九〇年から九二年のあいだに書かれたものである。この時期は、一八八〇年代にはじまるイギリスにおける社会主義復活の時期、不熟練労働者による新しい組合運動の勃興の時期であった。レーニンはこのような時代を反映したエンゲルスの発言を高く評価して、「エンゲルスは、古い労働組合の『ブルジョワ的労働者党』、特権的な少数者と、『下層の大衆』、真の多数者とを区別

し、『ブルジョワのお上品さ』に感染していない、この大衆に呼びかけている。これこそ、マルクス主義的戦術の核心である⁽¹⁶⁾と、主張している。

われわれはこれまで、レーニンがマルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論をどのようなものとしてとらえたのかのように解釈したか、という問題を考察してきた。右の多くの引用文からすでに明らかのように、レーニンがマルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論として一括して考察、評価しているものの内容を分析してみると、実は、マルクスによるものは非常に少く、そのほとんどがエンゲルスによるものであるという事実が判明する。その意味において、レーニンは、直接的には、マルクスではなく、エンゲルスのイギリス労働運動論を継承している、⁽¹⁷⁾と言いうる。だが、ここで、マルクス——エンゲルス——レーニンのイギリス労働運動論のそれぞれの異同と継承関係を論ずる余裕はない。またそのような問題は本章の主眼でもない。本章ではさしあたり、レーニンが、彼の時代状況をふまえて、彼なりの問題関心と方法で、彼の先駆者たちから、どのような問題点を学びとったかを、明らかにすれば足りる。

その主要な問題点とは、これまでの考察からすでに明らかなくとく、一、世界市場独占・植民地独占と日和見主義との密接な関連性、二、帝国主義国におけるプロレタリアート一般の「ブルジョワ化」現象、三、帝国主義国における労働運動と社会主義運動との遊離現象、四、帝国主義国における革命の展望と関連する、独占の崩壊、およびプロレタリアート下層大衆の組織化を基盤とする労働者政党の結成、という四つの問題点であった。

一九世紀イギリス労働運動にたいする鋭い観察者から継承したこれらの問題点、これら四本の支柱を骨組みとして、レーニンは、彼自身の二〇世紀イギリス労働運動論をどのように構築していったのか。この問題を考察することが、次章以下の課題となる。

- (1) 全・XXII・三六三—三七五ページ、参照。
- (2) 全・XXI・六四ページ、参照。
- (3) 全・XXII・三七—三八ページ、参照。
- (4) 全・XXIII・一九—二二ページ、参照。
- (5) 同上、一九ページ。
- (6) 同上、二二ページ。
- (7) 全・XXII・三七—三八ページ。
- (8) 全・XXIII・一九—二〇ページ。

- (9) 同上、一二〇ページ。
- (10) 同上、一二一ページ。
- (11) 全・XXXII・三二八ページ。
- (12) 全・XXII・三六三—三七五ページ、参照。
- (13) 同上、三六三ページ。
- (14) 「帝國主義と社会主義の分裂」全・XXIII・一二〇—
一三、参照。
- (15) 同上、一二一ページ、参照。
- (16) 同上、一二八ページ。
- (17) 私は、かつて、レーニンの唯物論理解が、直接的には、
マルクスではなく、エンゲルスの唯物論理解を継承するも
のであることを指摘したことがある(拙稿「カール・マル
クス——その学説の基礎にあるもの——」、『一橋論叢』、

- 五九巻四号、四二—六ページ、参照)が、このような継承
関係は、レーニンのイギリス労働運動論においてもみられ
るものである。より一般的な問題として提起すれば、マル
クス＝レーニン主義という問題を考察する場合、われわれ
は、マルクスとレーニンを媒介するエンゲルスの存在を
軽視してはならない、ということである。
- (18) さしあたり左記の拙稿、参照。
「マルクスと植民地主義——植民地主義の歴史的役割—
—」、『思想』、五三〇号(一九六八年八月号)。
「エンゲルスの一九世紀末イギリス労働運動論」、『一橋
論叢』、六一巻一号(一九六九年一月号)。

(一橋大学専任講師)